

## 巻頭のことば

佐々木卓也先生は2023年3月末日をもって、本学法学部教授としての定年を迎えられることとなりました。先生が本学に着任されたのは1995年4月、ちょうど法学部に政治学科が創設される一年前にあたります。以来、実に27年の長きにわたって法学部の発展とともに歩んでこられました。この間、立教大学法学部長・立教学院理事（2012～2013年度）をはじめ、大学院法学研究科政治学専攻主任（2004年度、2010～2011年度）、政治学科長（2005～2006年度）、アメリカ研究所所長（2011年度、2014～2015年度）といった要職に就かれ、大学および学部の発展に多大なる貢献をいただきました。

佐々木先生は、アメリカ外交史・冷戦史研究を専門とされ、とりわけ第二次世界大戦後から1950年代にかけてのアメリカの対ソ封じ込め政策をめぐる実証研究を中心に、同分野を第一線でリードしてこられました。『封じ込めの形成と変容——ケナン、アチソン、ニッツェとトルーマン政権の冷戦戦略』および『アイゼンハワー政権の封じ込め政策——ソ連の脅威、ミサイル・ギャップ論争と東西交流』は、佐々木先生の代表作といえるでしょう。前者ではトルーマン政権においてジョージ・ケナンが提唱した節度ある対ソ政策が軍事偏重のそれへと変質する過程を、後者では続くアイゼンハワー政権の慎重で抑制的な対ソ政策を、とりわけ人的・文化的交流も含めた非軍事的側面を重視しながら活写されています。いずれにおいても佐々木先生が重きを置かれたのは、アメリカの対ソ政策に見られる慎慮であり、それを体現した政策立案者それぞれの信条や動向でありました。これらの研究は、未刊行史料を含む一次資料を丹念に渉猟した堅実な実証研究の成果であり、日本におけるアメリカ外交史研究の一つの到達点を示しています。

佐々木先生が果たされた主導的役割は、上のような専門的な学術研究のみならず、学部学生や一般の読者も含む幅広い意味での教育分野にも及んでいます。それは、先生が定評のある教科書・概説書を多数執筆・編集されていることから明らかです。単著として上梓された『冷戦——アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い』は、国内外の冷戦史研究を、一般の読者にも分かりやすい概説書としてコンパクトにまとめあげると同時に、これから本格的な研究を

志そうとする者への良質な手引書ともなっています。また、編著『戦後アメリカ外交史』は、戦後の世界秩序を大きく左右してきたアメリカ外交を総覧し、ローズヴェルトからトランプまで各政権の特徴を鮮やかに描き出しています。同書は幾度も版を重ね、戦後アメリカ外交の通史を学ぶための必読書として現在も多くの学習者の座右に置かれています。

こうして佐々木先生が丁寧に播かれた知の種は着実に芽を伸ばし、次なる世代の研究者育成にも脈々とつながっています。もちろん、学問的な資質ばかりでなく、包容力と傾聴力のある先生のお人柄に惹かれて研究室のドアをたたいた学生も少なくないことでしょう。ご着任以来、先生は大学院法学研究科の修士課程および博士課程において多数の院生の指導にあたられ、有為な人材を世に送り出してこられました。そして、先生のもとで学んだ教え子たちは、いまや全国各地の大学で教壇に立ち、さらに自分たちの後に続く世代に外交史や国際関係史の魅力を存分に伝え続けております。

学会活動・社会活動など学外においても、先生のご活躍は特筆に値するものばかりです。日本国際政治学会では理事（2006～2020年）、理事長（2018～2020年）、評議員（2020年～）を、アメリカ学会では常務理事（2008～2010年）、副会長（2020～2022年）を長年にわたってお務めになり、知の生産者としてばかりでなく、知の組織者としても、学界に多大な貢献を果たされてきました。さらには、外務省参与（2009～2010年）として、いわゆる「密約」問題に関する有識者委員会のメンバーとなったことを皮切りに、国家安全保障会議顧問（2016～2018年）、外務省外交記録公開推進委員会（2016～2020年）等を歴任され、その専門的知見を学問・教育の場以外にも能う限り還元されてきたことを強調しておきたいと思います。

ここに私どもは、深甚なる感謝と尊敬の念を込め、佐々木先生のご定年記念号を座右に献呈することといたします。今後も先生には、本学法学部の特別専任教授としてこれまでと変わらぬご指導をお願い申し上げるとともに、益々のご健勝とご活躍を心から祈念いたします。

2023年10月

立憲法学会会長

東 條 吉 純